

# 計画案の夢

アンビルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

'93~'95

16

COSMOSハウス 実施計画

文=白鳥健二  
写真=大橋富夫

## グアテマラ高地で考えた7日間の記録より

970212 うーん、空が高いな……。雲が美しい。それに、抜けるような澄みきった大気だ。グアテマラ・オーロラ空港にやっとのことでランディング。さあ、これから古都アンティグワへ行く。パンアメリカンハイウェイを一路西へ。五百年前の山岳都市ペタキムスリップ! 途中立ち寄ったアメリカ西海岸、マリブビーチの紺碧の海がチラッと頭をかすめる。970213 HOTEL VILLA SAN FRANCISCO (1 a AVENIDA SUR, ANTIGUA) の最上階(といっても3階建てのマヤホテル)に、アトリエCOSMOSのANTIGUA OFFICEを開設! 持参した計器は海拔1,475mを指している。周囲を三つの火山に囲まれた人口3万人の、まるでSHOW CASEのような小さな都市空間の片隅に私は仕事場を確保している。気分はもう“COSMOSハウス”の原案作りに入り込んでいる。

970214 夜明けとともに記憶が薄れていく。昨夜は遂に一睡もしなかった。これから寝る前にスケッチノートに記録しておこう。要するに、最初の案は南に向かってV字形に開いた開放型だった。今の案は南側を湾曲形の棟で一旦閉じて、その奥に二つの空間を連結させていくT字形だ。まるで正反対の考え方だ。南側に向かって扇状に開いている地形に対して開放系(V字)で対応するのか、それとも閉鎖系(T字)で対応するのか……。うーん、わからない。

970215 うーん、依然としてわからない。最初の案は開放系だったのだが、その後閉鎖系へ変わる。地形に合わせるのか、それとも対立させるのか? うーん……。

ホセ・ルイス・クウェヴァスの版画展を偶然見ることとなった。カンドー!! 作品をその場で数点模写させてもらった。ラテンアメリカ人特有の情念を強く感じるが、オロスコとも、タマヨとも違う。イペロアメリカの土着性に驚愕。頭をガーンと殴られた気分だ。強烈な太陽の陽だまりのもと、ブーゲンビリアの咲き誇るコロニアルパティオを囲む暗い空間にクウェヴァスの作品は静かに並んでいる。モノクロームな死の世界を思わせるこれらの作品が、極彩色の生命感あふれるパティオのまわりをシーンと包み込んでいる。ここでは生と死が二重構造を成している。生と死が完全に同時発生している。

970216 この聴病者!! お前は一体いつまでおのれのスタイルの中でイジジして居るつもりだ!! 私の気持が内部のどこかで異常に煮詰まっている。開放系か、それとも閉鎖系か。私の中で、相も変わらず押し問答が繰り返している。

970217 あー良く眠った。夜中に一度も目を覚まらなかった。久しぶりのいい朝だ。きのうは一日中アンティグワの町を歩きまわってしまった。考えながら……描きながら……。そして記録しながら……。『この聴病者!!』と怒鳴りつけながら間々まで歩きまわった。あーすっきりした。

970218 そうだ、全体を一旦閉鎖型にしたうえで新たに内部に開放性を確保する。少し見えて来た。扇形の未だかりの部分で地形に沿って東西に湾曲部に閉じたうえで、南北軸(直交軸)の一番奥の「要」の部分にアブスを配置する。そして両者の中間に最も開放的で、しかも理屈抜きに肉体的に気持の良いBIO-SPHEREを成立させる。このSPHERE(球)は、ブーゲンビリアの咲き誇る陽だまりのあのパティオのようなもの。無限の虚無の世界の中の一点の光明。深淵な死の世界に取り囲まれたこのネイキッドな「いのち」の存在。そんなミクロなSHOW CASEは生命的なもの象徴であって良い。聴病者の私にスコーン勇氣が湧いてきたような気がする。

970219 オーロラ空港を離陸したユナイテッド航空888便は、現在開夜をLAX(ロスアンゼルス空港)に向けて一直線に飛行中。私の眼下を、キラキラ輝いた光の集合体がゆっくりと通過していく。一つ一つと、適度な間をあけながら通過していく。宇宙に浮ぶ大銀河のようでもあるが、実は古代マヤ時代から永々と生き続ける土着集落の光の集中に違いない。

“明らかであって、空であり、不可分であり、光明の大きな集中の中に我々は住んでいる。汝自身の明知には生もなく死もない。これこそ不変の光明の私に他ならない。これを覚れば充分である”

今回持参した「チベットの死者の書」(川崎信定訳)の一篇を、私はノートに書き写しながらLAXの空港ロビーで短かった旅の終りを今ゆっくり楽しんでいるところである。

